

## 第14回全国市議会議長会研究フォーラム in 高知

令和元年10月30日(水)

基調講演「現代政治のマトリクス リベラル保守という可能性」

講師 中島岳志 (東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授)

現代政治のマトリクスということで、現在の政治というのがどういう大きな流れの中にあるのか、その中で保守という言葉が様々なところで聞かれ、この保守とはどういう概念なのか、保守のあり方、リベラルとは何かについての基調講演。

政治とは、内政面で大きく分けると2つの仕事をしている。1つは税金でお金を集め、それをどのように使っていくかというお金の使い方である、お金の出し入れをする仕事。もう一つは、お金の還元できない価値観、価値認識の問題である価値をめぐる仕事。このお金の問題と価値の問題をめぐる、政治は内政面において展開をしているという考え方。

お金の関係では、リスクの個人化とリスクの社会化を軸にして考える。リスクの個人化とは、リスクに対して個人で対応してくださいという考え方で自己責任論が強くなる。政治でいうと小さな政府に偏っていく。一方、個人化に対抗する、リスクの社会化とは、社会全体で補いましょうということで、セーフティネットの強化型となり、大きな政府型。

もう一つの価値の問題はリベラルとパターナル。リベラルとは、あなたの思想、考え方は認めましょう、その代わりに私が信じる思想、考え方については介入しないでくださいという考え方で、リベラルは自由という概念として発展していく。リベラル、リベラリズムは自由主義と訳し近代的な枠組みとなる。そして今回の講演の大きなポイントが、このリベラルの反対概念となる。日本ではリベラル対保守という対立概念が言われるがこれは間違いである。リベラルの反対語は英語でパターナル、日本語では父権的と訳す。強い権限、強い力を持った人間が価値のあり方に介入して選択していくことがパターナルという。政治家、政党を分析するときは、右や左、リベラルと保守という軸でなくて、お金の問題と価値の問題をめぐる位置付けて考えていくべきであるとする。

自民党を考えるなかで、現在の安倍内閣はどの位置づけとなるのか。パターナルな傾向が非常に強いと分析する。自由ということを積極的に容認するという方向には政治的な舵の切り方はしていない。政治の規模では、安倍内閣の最近では、幼稚園、保育園の無償化を行い福祉に力を入れているといわれ、リスクの社会化をしているとの見方もあるが、国際比較をして日本の政治規模を見なければいけない。

3つの数値がある。1つは租税負担率。これは税金が高いのか、つまり収入が多いのか小さいのかという数字を見る。租税負担率が高ければ大きな政府、小さければ小さな政府となる。2つ目はGDPに占める国家支出の割合の数字を見る。全国民経済の中でどのくらいの国家歳出があるのか、大きければ大きな政府小さければ小さな政府となる。3つ目は公務員数。千人当たりの公務員数の数字を見る。この3つの数値を国際比較すると日本は世界の中で指折りの小さな政府となる、データを客観的にみるとリスクの個人化が非常に行ききった、そういう社会になっているのが日本の現状。いま、地方の自治体の中で、非常に大きな問題となっていることが、公務員の非正規化の問題。非正規の職員が増えていく事は脆弱な自治体となり、災害に弱いという特徴がある。よって日本はかなりリスクの個人化ということが、政府の規模で進んできている状況がみられる。若干いろいろなお金を増やしたところで平均値より上にはなか

なかいかないというのが、今の政権の特徴とみる。自民党は昔からそうだったのかといえばそれは違うという見方。いまから 40 年から 50 年前の自民党は、リスクの社会化の軸の強い方向であった。これが戦後の自民党の一環した特徴であった。そのリスクの社会化の強い中で、田中角栄はパターンナルな方向、大平正芳はリベラルの方向という位置付け。70 年代の保守の危機といわれた時代に自民党の非常に強い基盤を安定させることのできた非常に強い政治家であり、この 2 つのラインが保守本流とやってきた。80 年代に入って、福祉にどんどんお金を出していく体制を見直さないといけないという議論になり、中曽根内閣でそこに手を付けた。その後、橋本行革、その揺り戻しの小淵内閣、そして森内閣を挟み、小泉内閣で一気にリスクの個人化へと動かしていくこととなった。官から民へ、規制緩和、構造改革、そしてマーケット至上主義ということが言われるようなあり方で、リスクの個人化へと動いていき、安倍内閣となり、更に価値の問題へ踏み込んでいく形となった。これが自民党 50 年の流れ。政治のマトリクスの中でそれぞれの枠の中を回り大きな変化を遂げてきた。

これに対して野党はどう考えるか。野党は揺れ動いている。今から 2 年前に希望の党が突然立ち上がったがあつという間に大きな勢力を失っていくという事態があつた。基本的に希望の党の中核にいたのは旧民主党の人たち。みんなで支えましょう、という社会化路線つまり、社会のリスク化が主張であった。価値の問題については極めてリベラルな考え方を提示しているその政党が小池百合子氏と組んだ。小池氏はもともと自民党で、安倍氏に近いマトリクスゾーンにいる。政治のマトリクスの中でいろいろな政治の組み方があるが、この組み方は何をやりたい政治なのか、政党なのかわからなくなる。その中で、自分たちには選択肢がなくなる、自分たちの選択肢を作ってくれという声が湧き上がってくる。そこに、枝野立てという声が出てきた。この時ラディカルデモクラシーが起きたと位置付けた。ラディカルデモクラシーとは、投票に行くだけでなく別の政治の関わり方があるという考え方が支柱になっている。直接的に政治を動かし、自分の声が政治家に届いていると有権者である投票者が思うようなデモクラシーの起動が大きな支持を集めた背景にあつたと考える。ラディカルデモクラシーは熱しやすく冷めやすい傾向がある。どのようにして冷めるかということ、自分たちの声が直接的に政治家を動かしていないと感じるとき、つまり、疎外というものを感じるときに、ラディカルデモクラシーに風船はしぼんでいくという傾向がありこの事は世界でもある。その隙間を縫って出てきたのが山本太郎という人。同じラディカルデモクラシーであるが、かなり違う起動のさせ方をしたということがポイント。政治学の中では 2 つのパターンがあると考えられている。枝野氏が熟議デモクラシーであることに對し、山本氏は闘技デモクラシー。闘技デモクラシーは、明確な対立軸を見せ、そこに強い言葉で迫っていくことで多くの民衆の情動的な面、感情的なものを起動させていく、戦いを挑んでいく、そういう形でもう一度、一票に何の価値があるのか考える人たちを立ち上がらせるという考え方。この動きが今後どのようにしていくか、今後の野党の中でどういう形をとるのか注目すべき選択のところ。この熟議デモクラシーと闘技デモクラシーとがどうバランスをとりながら、昔の自民党が担っていた政治マトリクスの枠を共闘して作れるかがもう一つの選択肢としての野党のあり方だと考える。過去の革新という考え方では支持が集まらなないと考えてきた。むしろ自民党がかつて担ってきたようなリベラルな保守こそがもう 1 つの選択肢として立ち上げなければいけない重要な概念であるということが主張である。リベラルと保守というものが 1 つ重要なタグを組んだときに、日本にもう一つの重要な選択肢が生まれてくる。本来はそれが保守本流とやってきた自民党の中に強くなってほしいと願うもの。かつて、自民党が担ってきた、革新ではなくしっかりとした保守のラインとして位置付けることが、重要なマトリクスとして求められていることな

のではないかと考える。

#### 所感

保守のあり方、リベラルとは一体何かということを政治のマトリクスに基づいた講演で、自民党の過去50年の変遷について分析する中で、現在の安倍政権の政治的位置づけを解説し、野党の取るべき戦略、今後についての講演であった。国の政治のあり方ということであるが、政治のマトリクスに基づく課題の中で、地方自治体の中で大きな問題となっていることも例としてあった。それは、日本がリスクの個人化が進む中での地方自治体の問題として、公務員の非正規化である。このことが脆弱な自治体が出てきている要因であるとの事で、今後このような現状を捉えて考えていかなければならないと感じた。また、熟議デモクラシーという概念は地方自治体では導入しやすい、非常に重要な民主主義の一番のベーシックな考え方であるということであった。しかし、地方自治体においてもどのような変遷をしてきているのか、また、松本市においても市政の変わり目にある中で、このマトリクスに照らし合わせて考えることも政治の見方の参考となるのではと感じ今後の参考としたい。